テサロニケへの手紙第一
これはパウロが一番最初に書いた手紙と思われ
その背景は使徒の働きに記されています
パウロが同僚のシラスと共にギリシャのテサロニケに行き
イエスについての良い知らせを宣べた 1 か月後
多くのユダヤ人とギリシャ人がイエスに忠誠を誓い
そこでの最初の教会を形成しました
しかし問題も起きていました
よみがえりのイエスこそ世界の王だというパウロの発言が疑惑を呼び
テサロニケのクリスチャンたちもイエスを王だと主張すると
ローマ皇帝への反逆罪で訴えられたのです
これが厳しい迫害に発展し
パウロとシラスはテサロニケから逃げざるを得なくなりました
2 人はテサロニケの人々を愛していたのでこれはつらい決断でした
パウロは後にテモテから
テサロニケ人は迫害にも負けずよくやっている成長していると聞き
この手紙を通して彼らとつながろうとしました
この手紙は大きく二つのセクションに分かれています
前半では彼らのイエスに対する誠実さを称賛し
後半ではイエスに従う者としてますます成長し続けるように励まします
そしてこの二つのメッセージを囲むように
3 つの祈りが記されています
この手紙の構成は美しく感謝の祈りで始まり
二つのセクションをつなぐ祈りがあり
最後はすべてを締めくくる祈りで終わっています
パウロはまずテサロニケ人の信仰他者への愛
そして迫害にも負けずイエスへの希望を持ち続けていることについて
感謝の祈りを捧げています
次にテサロニケ人が信仰を持つに至った経緯を記します
彼らはたくさんの偶像を礼拝していて制度的にも実践的にも
ギリシャとローマの神々を拝む文化に浸りきって暮らしていました
そんな彼らが偶像を捨て去り生けるまことの神に仕えるようになり
神の子が天から再び来るのを待っているとパウロは語ります
テサロニケのような街で創造主であるイスラエルの神と
王であるイエスに忠誠を誓うことは犠牲が伴います
地域では孤立し家族の怒りも買うでしょう
しかしテサロニケ人たちは
自分たちのために死んだイエスの圧倒的な愛と
彼がまたこの世に戻ってこられるという希望は
その犠牲に値すると思ったのです
それからパウロはテサロニケでの使命と
その地の人々と築いた友情を非常に親密な関係にたとえて語ります
彼らはパウロを自分たちの子どものようにみなし
パウロは彼らの母のようにあるいは父のようになったというのです
パウロはあなたたちを愛しているから神の良い知らせだけでなく
自分の命さえ喜んで与えたいと言っています
パウロのこの姿はクリスチャンのリーダーとは

力や支配力によってなるものではないことを教えてくれます
必要なのは
相手との健全な関係そして謙遜と愛をもって仕える姿勢なのです
パウロは自分は一度も金銭を要求したことはなく
ただイエスの名において愛し仕えたと書いています
次にパウロもテサロニケ人も受けている迫害について述べています
イエスがご自分の民に拒絶されたように
パウロも自分の同胞であるユダヤ人に拒絶され
テサロニケ人もまた同胞のギリシャ人に迫害されています
パウロはこれらの苦しみが
イエスの生と死の物語に連なるものであると言い
そこに慰めを見出しています
次にパウロは
自分とシラスが逃げたあとに
テサロニケ人たちが受けた苦しみについて聞いた時
どんなにつらかったかを打ち明けています
彼はテサロニケ人を励まし様子を見させるために
テモテを派遣しました
そして彼から
テサロニケ人たちがよくやっていると聞いて喜びました
彼らはイエスに忠実で神と人への愛に満ちていたのです
そしてパウロが彼らに会いたがっているのと同じくらい
彼らもパウロに会いたがっていました
パウロは忍耐を求める祈りをもって前半を閉じますが
祈りの中で後半で語る内容も紹介しています
まずテサロニケ人たちの愛を増し加えてくださいと祈り
また王であるイエスの再臨に希望を置いている彼らを強め
さらにきよくしてくださるようにと祈っています
手紙の後半は彼らの生活を
イエスの教えと一致させるようにというパウロの励ましで始まっています
具体的には聖なる者となることを追い求め
性的にもきよくあれということです
彼らを取り囲む性的に放縦な文化とは対照的に
彼らはイエスの教えどおり
結婚という聖なる契約関係の中でのみもたれる
性の美しさと力強さを味わうべきものなのです
性的な罪はその人の品格を損なうので
神はそれに対し厳重に警告されているとパウロは言います
イエスに従うということは
心を決めて他者を愛し仕えることを意味します
だからクリスチャンは働き者として信頼を得るべきで
それも金儲けのためではなくしっかりと経済的に自立し
また貧しい者に惜しみなく与えるために働くのだ
とパウロは教えます
そのあとパウロはイエスが再び来られる時のことについて
テサロニケ人たちの疑問に答えています
教会の中におそらく信仰のゆえに

殺されたのであろう人々がいて彼らの近親者たちは
イエスが再臨される時に何が起こるかを知りたがっていたのです
パウロは嘆きや喪失感はあるが死でさえも
クリスチャンをイエスの愛から引き離すことはできないと明言します
王として戻って来られる時
イエスは死んだ者も生きている者もご自身のもとに呼ばれます
パウロはここで興味深い表現を用いています
本来はローマの支配下にある街が
皇帝を迎えるために代表団を派遣して歓迎するときに使う言葉を
王であるイエスの到来を描くのに使っているのです
イエスもまた彼を出迎えて歓迎する代表団と空中で会い
義と平和の王国を打ち立てるためにこの世界に戻って来られます
パウロはこの希望があるからこそ
イエスに忠実でいられることをテサロニケ人に伝えようとしています
そしてまた平和と安全をもたらすのは皇帝だという
ローマのプロパガンダを茶化しているのです
ローマの平和とは敵を奴隷にし
軍隊によって制圧する暴力によってもたらされます
しかしイエスが王として戻ってこられる日には
このような不正を裁かれるとパウロは警告しています
王であるイエスに従う者は
未来のその日がすでに訪れているかのように今を生きるべきです
たとえ人間の罪という闇に覆われていても
天にある神の御国の光がこの地上でも
夜明けのように輝き始めているので
しっかりと目を覚ましていなければなりません
これらのことを勧めたのち
パウロは手紙の冒頭と同様に希望に満ちた祈りを捧げ
神が彼らをきよさで満たし
彼らが王であるイエスが戻られる日まで神に献身的で
責められるところのない者として保ってくださるようにと願います
第一テサロニケは王であるイエスに従うなら
世の常識とは違うきよい生き方をすることになると教えてくれます
このことは時に周囲からの誤解や反感を買います
しかしイエスに従う者はそういう敵意や反発に対して
愛と優しさと寛容をもって応えるべきです
そしてそういう生き方は
イエスの復活によってすでに始まっている
来るべき王国の希望から生まれるのです
きよさと愛と未来への希望を語る書
これがテサロニケ人への手紙第一です

【要約】
パウロの最初の手紙は、テサロニケに初めてキリスト教の教えをもたらし、最初の教会を設立した出来事に関連しています。パウロと同僚のシラスがテサロニケに行き、多くのユダヤ人とギリシャ人がイエスに帰依し、初の教会を形成しました。しかし、パウロの「イエスは世界の王である」という言葉が反乱の嫌疑を招き、厳しい迫害につながりました。パウロとシラスはテサロニケから逃げざるを得なくなりましたが、後にテモテから彼らの成功と困難について聞き、テサロニケの信者たちに手紙を送りました。

手紙は、テサロニケの信者たちの信仰、愛、希望を称賛し、彼らがイエスの教えに従い成長し続けるように励まします。また、手紙の中には感謝の祈りやテサロニケ人たちの性的純潔、勤勉な労働、他者への愛についての助言が含まれています。また、手紙はイエスの再臨に対する希望を強調し、クリスチャンたちはイエスの王国の価値観に従い、愛と優しさで反感に対処すべきだと説いています。